

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第39号 2023年10月31日 発行

目次

- * 諭吉のオランダ滞在 断想 (大久保健晴) 2・3
- * 『小幡篤次郎著作集』について (船木恵子) 4
- * 小幡篤次郎の漢詩 (金文京) 5・6
- * 『小幡篤次郎著作集』第2巻・第3巻の刊行 (西沢直子) 7
- * 中津市アーカイブズ講座参加記—2021～2023年— (上野大輔) 8
- * 新収資料紹介 9・10
- * 韓日の歴史をめぐるワークショップ Vol.7の実施 10
- * 主な動き 11
- * センター諸記録 (2023年4月～2023年9月) 12



韓日 歴史をめぐるワークショップ Vol.7 —国際理解における歴史学の役割を考える— 開催

コロナ禍で中止や縮小を余儀なくされていた行事が、ようやく再開となった。

今夏は慶應義塾内のプロジェクト助成未来先導基金による『『福翁自伝』と『学問のすゝめ』を「体験」してみよう』(11頁参照)のほかに、りそなアジア・オセアニア財団に助成をいただき、韓日歴史をめぐるワークショップの第7回目を、韓国ソウルで開催した。当日は zoom を利用しての配信も行い、日本やアメリカからも参加者を得ることができた(10頁参照)。

(西沢)

이화여대 사학과 · 게이오기주쿠대학 후쿠자와연구소
제7회 한·일 역사연구 워크숍
 일 시 : 2023년 8월 22일 (화) 10시
 장 소 : 이화여대 인문관 111호 비대면(ZOOM) 혼합 <https://url.kr/fcqori>

10:00	개회인사	최명필 이화사학연구소장 히라노 다카시(平野達) 후쿠자와 연구센터 소장
제1부: 사료 · 장수지 이화여대 사학과		
10:10~10:50	발표 1	고려 왕실 신발 계도의 특징 - 고려-송 왕실 신발 시험 기록의 비교를 중심으로 이명경 이화여대 사학과
10:50~11:30	발표 2	1910년대 일본의 외국인 교원 채용 과정 - 게이오대학-하버드대학을 중심으로 김태훈 후쿠자와 연구센터
11:30~13:40	연구교류회 및 식사 후 이화여사관 방문	
제2부: 사료 · 나사자와 나오키(西澤直子) 후쿠자와 연구센터		
13:40~14:20	발표 3	20세기 초 방커싱 '황궁(皇工) 무역'의 저항 노현진 이화여대 사학과
14:20~15:00	발표 4	아시아-태평양 전쟁기 총력전연구소의 인식조사 나카무라 료(中村 良) 후쿠자와 연구센터
15:00~15:20	휴식	
15:20~16:00	발표 5	톰 브래들리(Tom Bradley)와 LA 세계화 정책과 인간관계위원회 (Human Relations Commission) 박규리 이화여대 사학과
16:00~17:00	추가 회의 및 용담	

순차동역: 함매제(이화여대), 강태훈, 구지희(후쿠자와 연구센터)
 문 의 : 이화여대 사학과 history@ewha.ac.kr
 주 최 : 이화여대 사학과 4단계 BK21 지역사·세계사 교육연구팀 · 이화사학연구소
 게이오기주쿠대학 후쿠자와 연구센터
 홈페이지 : <https://my.ewha.ac.kr/historybk21>
 후 원 : 한국연구재단 · 리소나 아시아 오세아니아 재단





諭吉のオランダ滞在 断想

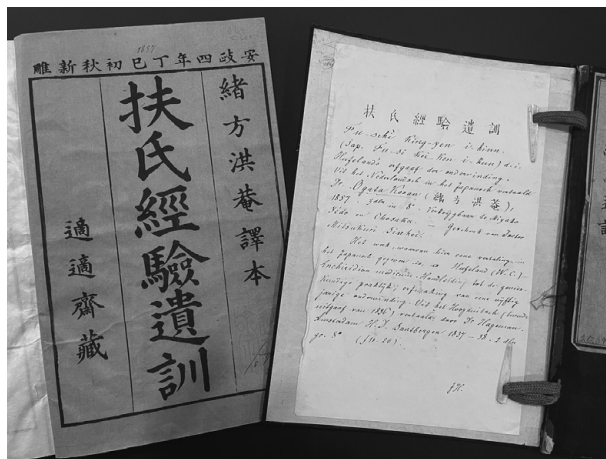
慶應義塾大学法学部教授
福沢研究センター所員

大久保 健 晴

今日のオランダにおいて最も古い歴史と伝統を持つ、ライデン大学。16世紀中葉に創設されたこの大学の図書館に、近代日本の始まりを象徴する一冊の貴重書が所蔵されている。

『扶氏経験遺訓』。同書は、江戸後期の蘭学者・蘭医である緒方洪庵が、イエナ大学及びベルリン大学で教授をつとめた C. W. フーフェランドの著作『医学必携』(Enchiridion Medicum) の第2版(1836年刊)の一部を、オランダ語訳版から重訳した作品である。「安政四(1857)年」公刊と記される。

筆者はこのたびライデン大学図書館貴重書室で、同書の写真撮影と公開の許可を得た。



緒方洪庵訳『扶氏経験遺訓』
(ライデン大学図書館貴重書室所蔵、著者撮影)

写真のように、所蔵本の扉には、オランダ語でその来歴を記した一枚の紙が貼付されている。そこには、注目すべき次の一節が記される。

“geschonk van Doctor Mitsukuri Siuhei.” 「箕作秋坪から寄贈された」。すなわちこれは、文久遣欧使節として1862年にヨーロッパを訪れた箕作秋坪が、オランダに滞在した際、ライデン大学の学長に贈呈した書である。箕作は大坂で適塾に入門し、緒方洪庵のもとで蘭学修業に励んだ経験を持つ。

この書物の存在については、既に J. P. Kleiweg de Zwaan, *Völkercundliches und Geschichtliches über die Heilkunde der Chinesen und Japaner* (Haarlem: de Erven Loosjes,

1917) や梅溪昇『緒方洪庵』(吉川弘文館、2016年)のなかで言及されている。ただしそこではもっぱら、贈呈者として名前が残る箕作秋坪の活動が取り上げられてきた。

しかし同じく適塾に学び、文久遣欧使節に参加した福沢諭吉もまた、この出来事に全く無関係であったとは考えにくい。『福翁自伝』のなかで福沢は、同使節によるヨーロッパ滞在を振り返り、「箕作秋坪と松木弘安と私と此三人は年来の学友で互に往来して居たので」、西洋見聞の目的を共有し、よく一緒に行動したと回顧している。また福沢によると、徳川末期、当時「交際最も深か」った箕作秋坪とは、たびたび一緒になって杉田玄白著『蘭学事始』の写本を読み合わせ、蘭学の先人たちの艱難辛苦に触れ、いつも二人して感激し、むせび泣いたという(「蘭学事始再版序」)。

これらの交情を考えれば、箕作と福沢が江戸で協力して、蘭学の師である緒方洪庵の作品を船に運び入れ、香港からエジプトを経てヨーロッパに渡る道中、大事に同書を携帯し、念願のオランダの地で、最古の学問的伝統を持つライデン大学に寄贈した可能性は、十分に考えられる。緒方の書は、極東の国・徳川日本の西洋学の学問的成熟の証左でもあった。箕作が寄贈者として名前を残すのは、福沢より約十歳年長であり、徳川政権の洋学機関・蕃書調所に勤務していたことによるのかもしれない。「西航記」をみると、福沢は1862年7月12日に「レーデンの大学校」を訪れている。



文久遣欧使節一行 オランダにて
(右端が箕作秋坪、右から2番目が福沢諭吉)

江戸時代の蘭学者たちはそれまで、オランダという未知の世界を夢想し、「オランダ正月」と称して賀宴を楽しむことはあっても、彼の地に降り立つことはかなわなかった。

福沢諭吉と箕作秋坪は、蘭学の伝統を継承し、先学が成し遂げられなかった、オランダの地を踏むという夢を実現した、「最初の蘭学者」であった。

福沢は緒方洪庵との関係について、父と子の間柄のようであったと述べ、自分が最も緒方にかわいがられたと臆面もなく語るなど、生涯にわたり敬意と愛情を抱き続けた。ライデン大学所蔵本を手にとると、師・緒方洪庵に注がれた福沢の熱い思いに触れた心持ちになる。



諭吉が訪れたライデン大学（著者撮影）

※ ※ ※

福沢は『福翁自伝』のなかで、オランダ訪問について、「各国巡回中 待遇の最も濃なるは和蘭の右に出るものはない」と回顧し、「第二の故郷」に帰ってきたようだとし、滞在中の記述は多くはないが、重要な断片として、ユトレヒトを訪問した際、福沢は手帳に「ミルドル有名の舎密家 に遇ふ」と書き残している（『西航記』）。

果たして、「ミルドル」とは誰か。状況から推察して、これはユトレヒト大学教授ムルデル（Gerardus Johannes Mulder）であろう。ムルデルは、C. H. D. ボイス・パロットやP. ハルティングらとともに、ユトレヒト大学自然科学研究の黄金時代を築いた「ユトレヒト学派」の一人である。ちなみに、ハルティングの記した *Anno 2065*（1865年刊）は、慶應義塾とならぶ三大義塾の一つと称された攻玉塾（後の攻玉社）の創設者・近藤真琴によって翻訳され、明治11（1878）年に『新未来記』として公開された。

ムルデルは、19世紀後半のオランダを代表する有機

化学者であり、たんぱく質を意味する「プロテイン」の語の成立にも深く関与した。福沢はすでに適塾で様々な科学書に触れていたが、オランダに渡り、はじめて当代一流の西洋自然科学者との面会を果たしたのである。

福沢はムルデルと会って、何を話したのか。それを伝える資料は現時点では見つからない。しかしムルデルの学説はやがて、同時代日本の学者たちの知るところとなる。後に福沢とともに明六社で活躍した蘭学者・西周も、その一人である。

福沢の訪問から約1年後の1863年6月、オランダに到着した西周は、津田真道とともにライデンに約2年半滞在し、ライデン大学教授S. フィッセルリングからプライベートレッスンを受けた。福沢とは対照的に、西がムルデルと面会した記録は残っていない。だが帰国後、西は草稿「生性発蘊」のなかで、「諸繊維の成分」に存在する「^{プロテイン}伯羅垤因」を説明する際に「^{ムルデル}模爾垤」の学説に触れ、「和蘭人、千八百四十年^{ユトレヒト}鳥特立の大学にて化学の博士に補す」と注釈を付している。

この論稿は、西周がイギリスの文芸批評家・哲学者であるG. H. ルイスによるオーギュスト・コント哲学の研究書（*Comte's Philosophy of the Sciences*, 1853）を抄訳した作品である。有機化学や生物学、生理学など自然科学の成果を、心理学や人間学といった人文社会研究へといかに援用し、両者を架橋するか。これはコント実証主義が直面した、そして19世紀西洋哲学の根源に伏在する、本質的な学問課題であった。

こうして徳川期の蘭学の豊かな土壌を基礎に、西洋人文社会科学と本格的に格闘する道が切り拓かれた。福沢諭吉のオランダ滞在は、その転換点に位置する。



諭吉が滞在したユトレヒトのシンボル、ドム教会（著者撮影）



『小幡篤次郎著作集』について

武蔵大学総合研究機構 船 木 恵 子

『小幡篤次郎著作集』第1巻が令和4年(2022年)3月に刊行されて以来、現在も刊行を重ねる作業が続けられている。著作集第1巻の冒頭には小幡篤次郎について、伝記や著作集が今まで出版されなかったことで福沢諭吉や慶應義塾の歴史の中に吸収されてしまった人物であると説明されている。そして小幡は学術的にも、また近代日本研究においても果たした役割が大きいにもかかわらず現在に至るまで十分に研究されてこなかった、つまり忘れられた思想家として紹介されている。ゆえに著作集の刊行目的は小幡の学術的業績の全体像を示すことであり、これが小幡篤次郎研究の第一歩になるだろうと主張されている。確かに全5巻に及ぶ小幡篤次郎著作集の大きさを考えると、あらためて小幡の業績の奥の深さと偉大さを実感する。幕末から明治にかけて近代化の時代の知識人たちは現代の我々以上にグローバリズムの波の中で、望ましい近代的日本人の形成を思索した先人である。小幡もその1人であり、欧米の文献を理解するため英語を短期間で身に付け、必要と思われるものを翻訳出版することによって近代日本の教育に役立てようとした。従って小幡の翻訳は英語から日本語に言葉を置き換えることを目的とする現代的な翻訳とは理念が異なり、未知の欧米思想や文化を日本文化に受容するに際して、まずは客観的に取捨選択することが必要だった。そのため翻訳する文献の高精度を重視する後の導入史研究の中では、翻訳初期の小幡の翻訳文献は深く研究されることがなかった。しかし19世紀の欧米文献が小幡の翻訳を通して欧米思想研究に貢献するのである。つまり『小幡篤次郎著作集』の良質のテキストは小幡が、そしてそれを確認する福沢諭吉が日本人にとって何を必要とし、何を必要としなかったかという取捨選択の過程を分析することができ、さらに小幡篤次郎独自の思想と教育をも理解することができるからだ。また同時代の欧米の複雑な哲学、宗教的背景と突き合わせることで分野を超えて日本の欧米思想研究にも貢献している。まずはその例をすでに刊行された巻の中から紹介したい。

著作集第1巻に所収された『博物新編補遺』はエジンバラの出版業者のロバート・チェンバースの『科学入門(Introduction to the Science)』の抄訳である。面白いこ

とに小幡は翻訳のタイトルをあえて『科学入門』にせず『博物新編補遺』にしている。松永俊男はこの時代が科学教育における「博物新編」の時代だと述べている¹⁾。『博物新編』は中国へ赴任した医療宣教師のR. ホブソンが出版したキリスト教自然神学に基づく科学論であり、一方チェンバース『科学入門』は脳科学の源流ともいえる骨相学から発想された唯物論的科学論である。西洋思想の流れからすれば対立する科学論同志なのだが、松永はまだ欧米的な宗教と科学の対立論争が存在しない当時の日本への導入においては、両者とも問題なく科学論として受容されたと述べている。そのため「博物新編」は明治初期に科学論を意味する言葉として流通していたと述べている。小幡はチェンバース『科学入門』22章の骨相学的発想から書かれた Man-His mental Nature をあえて省略せずに「人性論」として苦労して翻訳している。チェンバースが影響をうけた骨相学運動の中心人物ジョージ・クーム(George Comb)は無宗教の公教育を普及させようとした人物である。「補遺」の意味は補填するという意味である。小幡はキリスト教神学に基づく科学論『博物新編』の補填として『博物新編補遺』を翻訳出版したと考える。つまり小幡は科学的な教育の普及を目指していたからこそ、唯物論的な発想から書かれた22章をあえて翻訳したと考える。

次に著作集第2巻に所収された『弥児氏宗教三論』の一、二、三論である。三論だけが未完草稿になっている。もしこの著作集が刊行されなければ、ほぼ完成していたこの未完草稿は一般に知られることが無かったはずである。著名なJ.S. ミルの遺稿の『宗教三論: Three Essays on Religion』の特異性については第2巻解題に記載があるので言及しないが、あえて小幡が三論を出版しなかった事実や、草稿に書き込まれた複数の筆跡は小幡の思索の痕跡であり、チーム福沢ともいえる研究チームの議論の痕跡のようにも感じる。19世紀の欧米進化思想と日本の近代化を繋ぐ糸として『小幡篤次郎著作集』が学際的に利用され、また一般にも小幡篤次郎の翻訳思想の背後の欧米思想の変遷を知ること興味を持っていただけることを願っている。

1)「チェンバース著『科学入門』と小幡篤次郎訳『博物新編補遺』」桃山学院大学人間科学 No. 24. 2003.



小幡篤次郎の漢詩

福沢諭吉協会会員 金 文 京

『小幡篤次郎著作集』刊行に際し、福沢研究センターの西沢直子氏より、小幡の漢詩書幅写真数点を示され、また中津の福沢記念館において実物を見る機会を得た。そこでこの場を借りて小幡の漢詩作品の一端を紹介したい。取り上げるのは福沢諭吉から贈られた詩に対する小幡の和韻詩、七言絶句である。

この詩を小幡が揮毫した書幅は、以下の3点が現存する。①縦長の書幅で、詩の後に「和福沢先生韻却呈」（福沢先生の韻に和し却りて呈す）と端書し、「小幡寅」と署名したもの（写真参照）。②横長の書幅で、前に「和福沢先生直示高作却呈机下」（福沢先生の直示せる高作に和し、却りて机下に呈す）と書き、詩の後に俳句（後述）を記して「小幡篤次郎拝草」（小幡篤次郎拝して草す）と署名したもの。③縦長の書幅で、詩の後に「録答福沢先生之旧作」（福沢先生に答えし旧作を録す）と端書し、署名は「幡篤」とするもの。①と②は福沢から詩を示された後、間もなく福沢に呈したものの、③は端書からすると、後日それを再録したものである。まず①によって、詩の原文とその訓読を示す。

西俗移來百事新	西俗移り来たりて百事新たなり。
先生教導致心身	先生の教導にて心身を致す。
如今政海風波惡	如今政海は風波惡し、
更向何人欲問津	更に何人に向かいてか津を問わんと欲する。

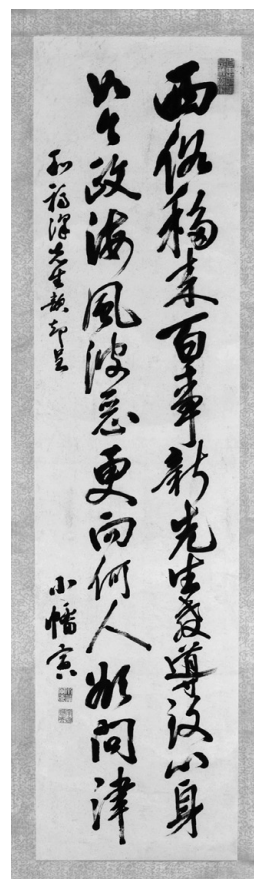
（押韻は「新・身・津」、韻部は上平声真韻）

第四句の「問津」は、津（船の渡し場）のありかを尋ねるということで、ここでは前句の「海」「風波」にかけて、荒波を乗り切る方法を質問することである。全体の意味は、西洋の風俗、文化が日本に移され、世の中万事新たに変わってしまったが、先生の教育指導のおかげで、私は心身ともに成長し、新しい世の中に適応することができた。しかしいま政界は荒波激風にさらされ険悪な状況である、いったい誰に解決の方途を尋ねればよいのであろう、ということである。若くして福沢の勧めにより慶應義塾に学び、後年、貴族院議員、義塾塾長などを歴任、福沢の片腕として尽力した小幡に相応しい詩であると言える。

なお第四句を②は、「更向何人問好津」（更に何人に向かいて好き津を問わん）とする。意味はほぼ同じだが、このように変えた理由は、「欲」は「向」以下すべてにかかるので、「更に何人に向かいて津を問わんと欲す」という訓読にするためには、「更欲向何人問津」でなければならず、それでは句の形が整わないからで（七言句は四字三字で切れる）、それに気がついて「欲」を削り「好」を補ったのであろう。「政海は風波惡し」なのであるから、好い渡し場を選ばねばならない、ということでもある。しかし③ではやはりもとのままにしてある。

いずれにせよ、この句の意味は一考を要する。政界の荒波を乗り切る方法を誰に尋ねたらよいのか、ということだが、主語を小幡とすれば、それは福沢先生に尋ねるほかはない、ということになる。ただし「何人に向かいて津を問わん」という場合、通常は誰も問うべき相手がいないという嘆きのニュアンスになる。近い例では、木戸孝允の「潜行過天王山下」（潜行して天王山の下を過る）詩（『松菊遺稿』）に、「勤王唱義已多歳、欲向何人説杞憂」（勤王の唱義已に多歳、何人に向かいて杞憂を説かんと欲す）とあるが、これは誰も説く相手がいないということである。もしこれが福沢死後の詩であれば、もう先生に尋ねることはできない、ということになる。しかしこの詩は明らかに生前の福沢からもらった詩に答え、福沢に進呈したものである。とすれば、今回ばかりは福沢先生にも、はたして妙策はあるだろうか、という意味になるのではないだろうか。

問題はこの詩に対応する福沢の詩が見当たらず、これがいつの詩なのかを特定できないことである。①端書



慶應義塾図書館所蔵

の「韻に和す」というのは、相手の詩と同じ韻を使って詩を作るということで、これには同じ韻字、この場合なら「新・身・津」で押韻する次韻と、同じ韻部の別字、この場合では上平声の真韻に属する字（たとえば真、春、人など）で押韻する依韻があり、どちらも和韻と言い得る。ところで『福沢諭吉全集』の「詩集」に見える現存の漢詩には「新・身・津」で押韻した詩はない。つまり現存の詩で考えるかぎり、次韻ではないということになる。一方、真韻の字を使った詩は全136首中40首、つまり全体の3分の1近くを占め、真韻は福沢がもっとも愛用した韻部であった。ただし贈詩と答詩の間には、内容上なんらかの関係があるのがふつうで、その点ではどうも該当する詩は見いだせない。かつ和韻には次韻と依韻があるといっても、この時代、和韻といえば通常は次韻である。福沢は甥の中上川彦次郎と漢詩の遣り取りをしているが、すべて次韻であった（『福沢手帖』153、「福沢諭吉の漢詩14・『民情一新』完成と中上川彦次郎との詩の応酬」参照）。ましてこの詩は、②の端書によれば福沢から直接示された詩に和韻したものであり、次韻と考えるのが妥当である。つまり福沢が小幡に贈った詩は現存しない可能性が高い。

さてでは、この限られた条件の中で、この詩がいつのものかを考えてみると、福沢の政治活動の中で「如今政海は風波悪し」にもっとも相応しい時期は、明治十四年の政変であろう。この政変によって福沢は窮地に追い込まれ、そのことは終生福沢の脳裏を去ることはなかった。一方この時の小幡は、中上川など政府に出仕した多くの門弟が免職になったのとは異なり、比較的冷静でいられる立場にあった。そこでこの政界の嵐を先生はどう切り抜けるおつもりか、と婉曲に問うたのが、第四句の意味ではないだろうか。証拠は何もないが、一応このように推測して、福沢の詩が将来発見されることを期待したい。なお②には、漢詩の後に、「雪打をする児覚へす雪の冷」という俳句が見える。これも小幡の作であろう。雪合戦をする子供は雪の冷たさを感じないということで、戦いの当事者には現実の厳しさが見えないという忠告とも、戦いの当事者は現実の厳しさなどものともしないという意気込み、励ましとも解しうる。これも明治十四年政変での福沢の境遇に相応しいと言えるであろう。「雪打」は福沢の号である「雪池」を暗示しているのかもしれない。小幡は福沢の詩に対しまず①を送り、さらに第四句を修正し、この俳句を書き添えた②を福沢に進呈したと考えられる。

最後に書幅の落款（印章）について述べたい。①の左下に「小幡／寅直」「字曰／誠夫」（字は誠夫と曰う、「／」は改行）の方形陽刻朱印2つがある。「寅直」は小幡の諱、誠夫はその字である。右上の閑防印（自分の好きな文句などを彫った長方形縦の印）は「自由之所栖／是我郷里」陰刻朱印である。この「自由の栖む所、是れ我が郷里」という文句は、『西洋事情』二篇巻之一の例言（明治2年、『全集』第1巻）に、「亜米利加騒乱の時に（中略）当時有名のフランキリンが云へるには、我身は居に常処なし、自由の存する所、即ち我居なりとの語あり」と見え、アメリカ建国の父、ベンジャミン・フランクリンの言葉を引用したものである。福沢自身も「題時事新報」詩（作年未詳）に「自由所在里乃仁」（自由の在る所の里は乃仁）と用いている（富田正文『福沢諭吉の漢詩35講』参照）。「里乃仁」は、『論語』『里仁』篇の「里仁為美」（里は仁を美しと為す）による。ちなみにこの文句は、明治前期の民権運動の中で広く知られていたらしい。たとえば民権運動家として有名な植木枝盛の『無天雑誌』（明治17年）には、「吾無国、自由存処是我郷里」（吾れに国無し、自由の存する処是れ我が郷里）と見え（宮城公子「吾無国自由存処是我郷里」、『甲南大学紀要文学編』63号、1986）、また高知では、明治11年の招魂祭で鉢巻きに「自由棲処是我郷里」と書いた青年が行進したという（『歴史万華鏡』第44回「土佐は自由民権のメッカ」、高知市広報『あかるいまち』2015年12月号。堀川貴司氏のご教示による）。小幡は明治4年に翻訳出版した『英氏経済論』でも「録米人芙蘭麒麟語」（米人芙蘭麒麟の語を録す）として「自由之所棲は吾郷里」を引いており（『小幡篤次郎著作集』第3巻解題参照）、いわゆる「先生の教導」の中でも、この言葉は重要な意味をもっていたのであろう。

なお②には落款はなく、③は署名の下に「箕田／居士」方形陰刻朱印がある。「箕田」は「三田」である。

小幡にはこのほか、「閑居雜咏」、「家居雜咏」など、身辺の花木や自然を詠んだ詩がある。これらの詩を読むと、小幡が庭に牡丹などの花を植え楽しんでいたことがわかる。一方、福沢にはその種の詩はまずないと言ってよい。福沢先生が庭に植えた草花を愛でている姿は、ちょっと想像しにくいであろう。本人も「庭園^{など}も手間潰しにて馬鹿らしく」と言っている（明治23年7月8日、山口広江宛書簡）。このように漢詩からは、著述からはうかがい難い両者の気質の違いを知ることができるのである。



『小幡篤次郎著作集』 第2巻・第3巻の刊行

西 沢 直 子

2022年3月に第1巻を刊行した『小幡篤次郎著作集』は、本年3月31日付で第2巻（収録著作『西洋各国銭穀出納表』『上木自由之論』『弥児氏宗教三論』『議事必携』および明治11年までに新聞雑誌に掲載された論説）、10月25日付で第3巻（同『英氏経済論』）を発刊した。

本著作集では函を制作した。函を作るとページ数の決定が早まって編集期間が短くなり、また図書館等では廃棄されてしまうので「もったいない」という気持ちもあったが、刊行委員会で話し合い、小幡の初めての著作集には、やはり函のある装丁が相応しいということになった。函の表には、小幡の署名を割り振った。完結後5冊を縦に繋げると、「小幡篤次郎」の文字が現われる仕組みである。また背には、第1巻は「小幡篤次郎」第2巻は「箕田居士」第3巻は「小旗」の落款を配し、5巻揃うと陽刻・陰刻が交互になる。図書館等でも函が捨てられずに再利用されたら、嬉しい限りである。

編集においては、第1巻での課題がなお継続している（『福沢研究センター通信』第36号拙稿）。誤字・脱字・衍字、そして用字の不統一は、明治半ば頃になっても解消されない。この世に存在しないであろう漢字も、相変わらず多々出現する。委員の先生方や金文京先生に、次々と質問をしては御教示いただいている。

第2巻に収録した『西洋各国銭穀出納表』は、外来語表記が厄介であった。濁点、半濁点、音引き等に規則性がない上、難読の国名や地名、人名が多く、定番の表記がないものもあった。悩んだ末底本通りとし、巻末に外国名・地名・人名の漢字表記一覧を付した。また字上げ字下げ字間等のレイアウトに一貫性がなく、それを直すかも悩ましい問題であった。手を入れるのは好ましくないが、かといって版本より1ページに入る情報量が多いため、数字の位置のずれは全体像をわかりにくくする。結果、必要最低限でレイアウトを整えることにした。

第2巻には、刊行されなかった『宗教三論』『一神論』の原稿も収録した。これは複数の筆から成り、訂正が小幡によるものと思われる。第1巻の福沢諭吉の緒言によれば、明治10年5月に小幡がヨーロッパ遊歴に出発する際、第3編第3編の原稿を「行李」につめて旅中「余暇に再考」とある。そのため出発前に手分けをして浄書したと思われ、写し間違いや筆写者ごとの特徴もあった。推敲の過程がわかるように翻刻できればよかった

が、読みにくさや紙幅の都合上、訂正後の文章のみを掲げた。

第3巻に収録した『英氏経済論』は、明治4年から10年という長い年月をかけた著作なので、巻之一から三、巻之四から六、巻の七から九で様相が異なる。巻之三の途中までは意味を表す振り仮名が多用されているが、その後極端に減少する。振り仮名は、その位置が悩みどころであった。版本は彫師の腕次第で、大きさを変えたり左右に微妙にずらすことで、1つの漢字に自在に振ることができる。しかし現代では印刷に制約があるのでそれができない。利場普宇留や阿駄武須美巢など、漢字の音と1対1ならよいが、入世留久のようにアンバランスな場合もあり、また意味を表す場合は財本のように1対1ではないので、均等割りと併用になった。

第2巻には川崎勝・平石直昭両刊行委員、舩木恵子・大久保健晴両編集委員および西沢、第3巻には池田幸弘刊行委員西沢共著による解題がある。版本を手にしなないとわからないことは記しておこうと考え、判型や表紙の種類、丁数など細かな情報も書き込んだ。読者にとっては読み進む上で煩雑さもあるが、小幡研究の今後を期待すれば、書誌情報は必須のものになるであろう。コロナ禍により各機関で閲覧制限が続いた、あるいは現在も続いていることを受けて、当初考えていたより調査数は少なくなってしまったが、小幡篤次郎の出身地であり、生涯関係が深く、歿後は蔵書が寄贈された中津での調査を、中津市学芸員の三谷紘平さん、松岡李奈さん、曾我俊裕さん、福沢記念館の泉史朗さん、荒木さとみさんをはじめ、中津市のご協力により十分になすことができたので、意味のある情報が提供できたと考えている。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

第3巻まで編集を進めてきて、改めてテキストを校訂する怖さを感じている。彫りの甘さによる不鮮明は、何冊比較しても答えがでないときがある。「従フ」なのか「従ス」なのか、たった1文字でも意味が逆になってしまう。原典がある場合は、該当箇所と比較し決めてきたが、ない場合の責任は大きい。肝に銘じながら、残り2巻の作業を進めていきたい。

なお、第2巻まで編集委員を務めていただいた住田孝太郎さんは、先年度末をもって任期満了となった。ここにお礼申し上げる。



中津市アーカイブズ講座参加記

—2021～2023年—

慶應義塾大学文学部准教授
福沢研究センター所員

上野大輔

中津市アーカイブズ講座と私との関わりは、2021年からである。COVID-19の影響もあり、現地入りは叶わなかったが、11月27日にオンライン講義を担当させて頂き、江戸時代の仏教教団について取り上げた。

その翌年（2022年）の8月23日から27日までの5日間、アーカイブズ講座に参加した。現地参加はこれが初めてである。前日に現地入りし、中津駅前の福沢諭吉像の辺りを歩いた。ホテルの部屋の窓からは、遠くに周防灘（豊前海）が眺められ、船舶が航行している。講座前日の、少し落ち着いたひと時である。

翌日からは、充実した5日間となった。会場は新中津市学校で、針谷武志先生の率いる別府大学の学生が参加し、久留米大学の学生も参加していた。学生は合わせて19名。素直でまじめな方が多かったように思われる。また、講師やティーチングアシスタント（TA）として、別府大学・久留米大学・神戸大学・九州大学などの皆さん、そして慶應義塾福沢研究センターの皆さんも参加された。初日には市長をはじめとする中津市の関係者の皆さんもお見えになり、開講式が催された。その後、講師による多彩なセミナー（講義）、福沢諭吉旧居・福沢記念館の見学、実習（史料の撮影、目録取り、襖下張り文書の整理など）がぎっしり詰まっている。セミナーは夕食後にも行われた。

私もセミナーを1コマ担当し、江戸時代の民衆と浄土信仰の関係について講じた。実習では、西沢直子先生と一緒に、中津藩士であった梅田家に伝来した文書群（梅田家文書）の目録取りを担当させて頂いた。学生が目録カードを記入するのをサポートするのだが、長文の書状をはじめ、難易度の高い文書と格闘することとなった。中津市の日本史専門の職員さんに、史料上の人名・地名などを教えて頂いた。

朝の8時台に中津市の職員さんが迎えに来られ、日程を終えてホテルに戻るのには夜の8時台。それからメール対応や少しの仕事などをこなして就寝。準備段階からの職員さんの献身的な支えによって、無事に日程が進む。初日の開講式の前には、職員さんのご厚意で中津市歴史博物館をご案内頂いた。そして最終日の実習後には、閉講式がある。全国屈指の充実度を誇る講座と言ってよいだろう。暑い夏の思い出となった。

そして年が巡り、2023年8月29日から9月2日までの5日間、アーカイブズ講座に講師として再び参加した。1年ぶりに現地入りし、新中津市学校を訪れると、昨年の記憶がよみがえってくる。今回は、夜間のセミナーはないようで、昨年度とほぼ同様だがゆとりのあるスケジュールが組まれていた。学生の参加は、少し減って15名であった。その中に、昨年も見た顔がある。彼は大学院生になっていた。聞けば、3回目の参加とのこと、私の参加回数よりも多い。アーキビストを目指しているという。

例によってセミナーを1コマ担当し、江戸時代の仏教教団について講じたが、今回は中津地域の事例にも少しだけ触れた。実習は、昨年と同様、西沢先生と一緒に梅田家文書の目録取りを担当した。やはり文書の難易度は高かったが、記入マニュアルの改訂や参考資料の追加工作成といった、西沢先生や中津市職員さんの周到な準備と、学生諸君の前向きな姿勢のおかげで、かなり順調に目録取りが進んだ。TAの皆さんも明るい雰囲気ですべてをサポート下さった。私のほうで読み進めて学生に記入させるスタイルを途中で反省し、学生にくずし字辞典を引いて調べながら記入してもらうこととした。興味深い史料にも出会ったが、その中身については、機会を改めて取り上げることとしたい。あっという間の5日間となった。

中津市の関係者の皆さん、講師・TAの皆さん、そして学生の皆さん、今回もお世話になり、ありがとうございました。そして来年以降も、参加したいと思います。できればミ生を誘って。



新収資料紹介

令和5年4月から9月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の一部を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながらすべての資料をご紹介しますが、この場をお借りして御礼申し上げます。

■杉亨二宛福沢諭吉書簡 明治10年(1877)7月2日付 1通(額装) 【寄贈】

故土橋俊一氏旧蔵資料。土橋氏は慶応義塾元職員で、『福沢諭吉全集』(全21巻、岩波書店、1958～1964年)の編纂をはじめ、福沢諭吉や慶応義塾に関する多くの書籍を編集・校訂・執筆しており、生前土橋氏が購入したものを妻敬子氏よりご寄贈いただいた。

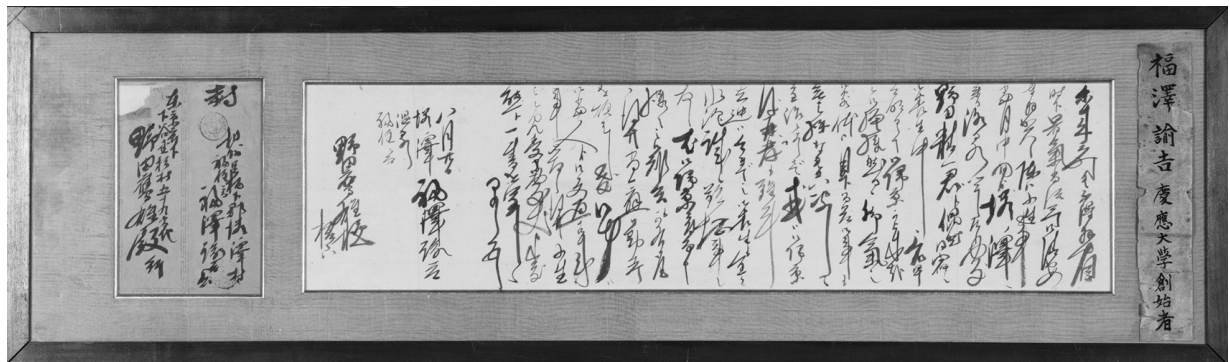
杉亨二は、明治4年に太政官正院政表課に出仕し、同12年には山梨県で、個別世帯表による日本における国勢調査の先駆となる「甲斐国現在人別調」を実施した。福沢はこの書簡で、統計に明るい杉に日本、英国、亜国、仏国それぞれの通貨量について尋ねている。杉の回答によるものと思われる係数が福沢の『通貨論』(『福沢諭吉全集』第4巻、岩波書店、1959年)にみられる。

本書簡は『福沢諭吉書簡集』(全9巻、岩波書店、2001～2003年)第2巻(21～22頁)に掲載されている。

■野田鷹雄宛福沢諭吉書簡 明治13年(1880)8月20日付 1通(額装) 【購入】

野田鷹雄は、明治10年6月に入社した野田精一(精一郎)の保証人。この年の8月15日から24日まで箱根塔ノ沢の福住に滞在していた福沢は、同宿となった野田精一の脚気が未だ快復していないことから、帰京する精一のさらなる養生を野田鷹雄に勧めている。

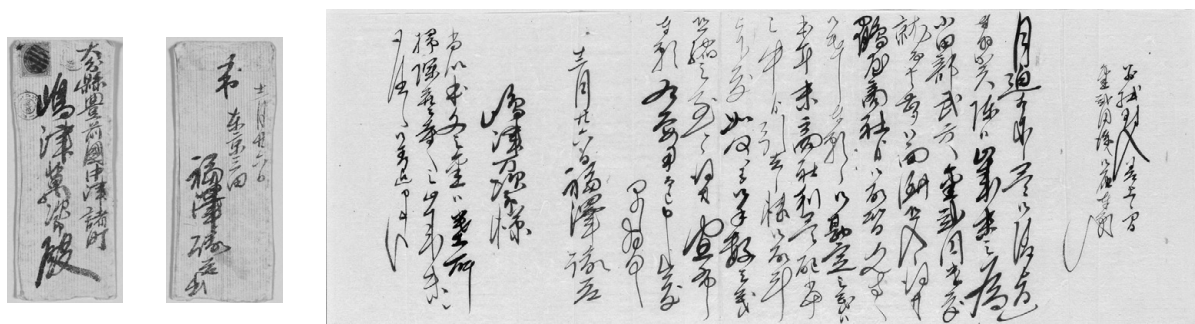
本書簡は『福沢諭吉書簡集』第3巻(22頁)に掲載されている。



■島津万次郎宛福沢諭吉書簡 明治14年(1881)12月26日付 1通 【購入】

島津万次郎は、旧中津藩の重臣であった島津復生の長男で、明治3年8月に入社し、5年9月頃まで在籍していた。帰郷後は中津市学校の話人を務め、とくに会計面で尽力し、また商社経営にも関わった。この書簡で福沢は万次郎に対して、小田部武(福沢長姉礼の夫)に託して菩提寺へ渡す費用と鶴屋商社の配当金との振替を依頼している。鶴屋商社とは旧中津藩士たちが経営していた商社で、福沢も出資している。

本書簡は『福沢諭吉書簡集』第3巻(177～78頁)に掲載されているが、刊行時には校訂ができていなかった。



■猪飼麻次郎宛福沢諭吉書簡 明治22年(1889) 8月12日付 1通(額装)

【寄贈】

故土橋俊一氏旧蔵資料。

猪飼麻次郎は福沢家とは姻戚関係にあり、この頃は長崎商業学校長と長崎尋常中学校長を兼務している。福沢はこの書簡で近況を伝える一方で、リウマチに苦勞している猪飼にラシャ製で馬用のブラシのような「字消し」での乾布摩擦を勧めている。

本書簡は『福沢諭吉書簡集』第6巻(164～165頁)に掲載されている。

■松山棟庵宛福沢諭吉書簡 明治29年(1896) 10月20日付 1通

【購入】

松山棟庵は、慶応義塾医学所の初代校長で、東京慈恵医院医学校(後の東京慈恵会医科大学)の設立や松山病院の創設、さらに東京医学会(後の日本医師会)、大日本私立衛生会などの設立にも尽力している。その一方で、福沢家の家庭医を務めるなど、終生医師として診療にもあたっている。この書簡では、福沢は松山に最近の思わしくない体調を報告し、下剤の服用について指示を求めながら、新しい薬の投与を願っている。

本書簡は『福沢諭吉書簡集』第8巻(242～43頁)に掲載されているが、刊行時には校訂ができていなかった。

■柏瀬権治郎宛福沢諭吉書簡 年未詳 8月1日付 1通

【購入】

『交詢雑誌』第6号附録(明治13年3月)と第42号(同14年3月)の「交詢社員姓名録」によると、柏瀬権治郎は交詢社員で、住所が「下野国足利郡葉鹿村」とあり、栃木県で織物業を営んでいたようである。福沢と柏瀬との間にどの程度の親交があったかは不明だが、福沢は柏瀬との書簡のやり取りのなかで、財産を標準として議員選挙を実施することについて疑問に思っていることを伝えている。

『福沢諭吉書簡集』(全9巻)に未掲載の新資料である。

(文責 岡部敏和)

梨花女子大学史学科・梨花史学研究所・慶應義塾福沢研究センター共催 韓日の歴史をめぐるワークショップ Vol. 7 の実施

2014年の部局間協定締結後、韓国梨花女子大学と研究交流を続けてきた。本年度は、2016年から始まったワークショップの第7回目を韓国で開催した。韓国での開催は2018年に続き2回目となる。

8月21日(月)に日本を出発し、その日の午後は梨花女子大学チャンスジ先生および大学院生と共に、学芸員による解説を受けながら国立民俗博物館を見学した。翌8月22日には、梨花女子大学にて研究発表会を行い、梨花女子大学からは李美京氏による「高麗と宋 医官選抜試験科目の比較」、盧炫績氏による「20世紀初頭パンカ島における「華工貿易」の抵抗」、朴圭里氏による「トム・ブラッドリーのLA世界化政策と人間関係委員会」、慶應義塾からは姜兌琬氏による「1910年代日本における外国人教員の受け入れ過程—慶応大学・ハーバード大学間を中心に—」、中村陵氏による「アジア・太平洋戦争期における総力戦研究所の民心調査」の5つの報告がなされ、活発な質疑応答が行われた。また慶應義塾から参加した大学院生や研究者が各々取り組んでいる研究について紹介、交流会を行い、梨花歴史館を見学した。8月23日には梨花女子大学が準備してくださったマイクロ

バスで水原に赴き、学芸員の解説を受けながら、華城行宮や華城博物館の見学を行った。福沢研究センターに訪問教授として滞在されたことがある、延世大学王賢鍾教授(韓国近代史)による水原の歴史に関する講義もあった。あいにくの雨勝ちであったが、充実したプログラムとなった。

SNSの浸透によって、人びとの感情が情報操作に左右される危うさが生み出されている。常に過去を意識する歴史学は、国際理解にとって両刃の剣であり、特に東アジアにおいては、歴史と真摯に向き合おうとすればするほど、理解を拒むものも生まれてくる。それを乗り越えるためには、若い研究者が幅広く交流し語り合い、実際に資料にふれあう機会を持つことが重要であると考えている。

なお、本プログラムは、りそなアジア・オセアニア財団の助成を受けた。心より感謝を申し上げたい。

慶應義塾からの参加者は以下の通り(50音順)。飯島典子、李喜珍、岡部敏和、加藤学陽、姜兌琬、具知會、染矢奈樹、中村陵、西沢直子、平野隆、白采原、山中惇敏。

(文責 西沢)

主な動き

■『小幡篤次郎著作集』刊行記念公開講座

一般社団法人福澤諭吉協会と共同で行なっている小幡篤次郎著作集編集刊行事業について、昨年度第2巻まで刊行(全5巻予定)しているが、それを記念して「小幡篤次郎の再発見」と題して福澤諭吉協会と共催による記念講座を開催している。第1回は5月20日西沢直子君による「小幡篤次郎小伝」、第2回は6月24日川崎勝氏による「開成所・東京学士会員時代の小幡篤次郎」の演題で開催された。いずれも土曜日の10:30～12:00、東館6階G-Labで行なわれ、30名以上が参加し、活発な質疑も行われた。10～12月にかけてあと3回開催予定である。

慶應義塾福澤研究センター・福澤諭吉協会共催
『小幡篤次郎著作集』刊行記念公開講座

小幡篤次郎の再発見

無料

＜会場＞東館 6階 G-lab
※12月16日(土)のみ東館ホール
＜時間＞10:30～12:00

小幡篤次郎は福澤諭吉の盟友にして福澤と共に慶應義塾、文芸社、『時事新報』を創設・発展させた人物です。その小幡の著作集『小幡篤次郎著作集』の刊行が進んでいます。
この刊行を記念して福澤諭吉協会は慶應義塾福澤研究センターと共に、公開講座を開講いたします。

10/14(土) 「『文明論之概略』と小幡篤次郎」
講師:平石直昭

11/18(土) 「小幡篤次郎訳『彌見氏宗教三論』と19世紀イングランド」
講師:船木恵子

12/16(土) 「英学者としての小幡篤次郎」
講師:池田幸弘

＜受講お申込み＞
下記のFAXかE-mailにて以下の期日までにお申し込みください
福澤諭吉協会 FAX:03-3454-1985 E-Mail:yukichi@axel.ocn.ne.jp
申込締切 ■10/14(土)は10/10(火)、11/18(土)は11/13(月)、12/16(土)は12/11(月)

■中津市アーカイブズ講座

8月29日(火)～9月2日(土)、中津市新中津市学校でアーカイブズ講座が行なわれ、講師8名、別府大学や久留米大学の学生15名が参加した。義塾からは講師3名のほかTAとして4名が参加した。

その中で、8月29日には、西沢直子君による「中津藩と梅田家資料」、上野大輔君(文学部)による「近世仏教教団の触頭制度とその地域的基盤」、8月31日には都倉武之君による「襖下張文書の「同定」作業をめぐる」の講義が行われた。

■未来先導基金プログラム

8月21日(月)～23日(土)の日程で、『福翁自伝』と『学問のすゝめ』を「体験」してみよう—大阪・中津2泊3日—を実施した。コロナ禍を受けて宿泊を伴うプログラムは4年ぶりとなった。

15名程度の定員で募集したが、応募者は2倍以上の35名、抽選の結果20名(高校生11名、大学生8名、大学院生1名)を当選者とした。事前説明会は3回実施した。

慶應高校の甲子園優勝と日程が重なり、直接応援に関わる高校生1名がキャンセルとなり19名の参加となったが、引率は大学教員2名・一貫校教員2名や当センター顧問のほか、中津市の学芸員の方々や大阪シティキャンパス職員にも協力を得て行われた。

1日目は大阪市内の福澤諭吉誕生地や適塾、緒方洪庵旧宅などの史跡をバスと徒歩で巡り、2日目は中津市内の福沢旧邸・記念館や小幡篤次郎生家跡などの史跡を徒歩で巡った。両日も夕食後に集合し、班分けして福澤諭吉の著書と照らし合わせて感じたことを話し合った。3日目は襖の下張り剥がし体験も行なった。



福沢研究センター諸記録 (2023年4月～2023年9月)

■ 諸会議

- * 2023年度執行委員会 (4月6日、5月11日、6月2日、7月6日、8月1日、9月7日)
- * 2023年度第1回福沢研究センター会議・慶應義塾史展示館所員会議 (6月14日)
- * 『小幡篤次郎著作集』刊行委員会 (6月26日)
- * 2023年度福沢研究センター・塾史展示館合同運営委員会 (7月20日)
- * 『近代日本研究』第40巻編集委員会 (4月12日メール審議、8月25日、9月29日)

■ 人事

- | | | | |
|--------|----|--------------|-------------|
| ＜顧問＞ | 新任 | 井奥成彦 | 4月1日～ |
| ＜客員所員＞ | 新任 | 石井寿美世 | 4月1日～ |
| | 新任 | 石田幸生 | 4月1日～ |
| | 新任 | 金沢裕之 | 4月1日～ |
| | 新任 | 三科仁伸 | 4月1日～ |
| | 新任 | 吉岡拓 | 4月1日～ |
| ＜研究嘱託＞ | 新任 | 白石大輝 | 4月1日～ |
| ＜訪問教授＞ | | 関庚模 (啓明大学教授) | 9月1日～ (1年間) |
| ＜事務局＞ | 新任 | 奥山美樹 (事務嘱託) | 6月1日～ |

■ 主な来往

- * 篠原幸宏氏・昌氏・幸太氏、模型打合のため来訪 (4月20日、7月26日、9月1日)
- * 中津市新教育長古口宣久氏、中津市教育委員会松岡李奈氏来訪 (4月28日)
- * 塾高生 (イギリス研究卒研)、塾史展示館見学対応 (6月14日)
- * 西道子氏他2名来訪 (6月15日)
- * 松山三田会会長安川氏来訪 (6月19日)
- * 松本氏 (山口広江子孫) 来訪 (6月30日)
- * 船橋郷土資料館、資料集荷・返却のため来訪 (7月12日、9月5日)
- * 三田俳句丘の会溝川史朗氏来訪 (7月13日)
- * 東洋大学図書館より3名来訪 (8月1日)
- * Norio Endo 氏親族来訪 (8月7日)
- * 大阪経済大学山尾忠弘氏来訪 (8月23日)
- * 三田倶楽部奈須氏来訪 (7月5日、9月1日)
- * アイスホッケー三田会来訪 (9月6日)
- * 未来を創る財団来訪 (9月22日)
- * 韓国慶熙大学李今花氏来訪 (9月25日)
- * 塾高野球部、展示館見学対応 (9月27日)

■ 取材対応

- * 東京新聞 (4月6日対応、戦争関連)
- * 読売新聞 (4月13日対応、1968年学生運動関連)
- * NHK ラジオ (オンライン) (5月1日対応)
- * NHK (5月19日、7月31日、9月13、27日対応)
- * テレビ東京 (7月3日対応)
- * トータルメディア開発研究所 HP 用取材 (7月24日)
- * 塾生新聞 (7月24日対応、戦争関連)

■ 出張・見学

- * 西沢、渋沢他1名、中津出張 (4月12～13日)
- * 都倉、横山、資料閲覧のため東大工学部図書館訪問 (4月12日)
- * 都倉、横山、企画展準備のため京都・大阪・神戸出張 (4月27～28日)
- * 都倉、資料調査のため塾高図書室訪問 (5月2日)
- * 西沢、津田塾大学で打合せ (5月18日)
- * 都倉、資料調査のため日吉仏教青年会館訪問 (5月23日)
- * 都倉、横山、江戸東京博物館資料閲覧のため出張 (5月26日)
- * 西沢、中津出張 (5月30日～6月1日、7月7～9日)
- * 横山、三菱史料館訪問 (6月1日)
- * 都倉、資料調査のため鈴木氏邸訪問 (6月7日)
- * 西沢他2名、中津出張 (6月20～23日)
- * 西沢、資料閲覧のため東書文庫訪問 (7月13、27日)
- * 都倉、鈴木孝夫資料調査のため出張 (7月25日)

- * 都倉、長岡出張 (8月3～4日)
- * 都倉、神戸・中津出張 (8月5～6日)
- * 平野所長、西沢、飯島、韓国出張 (8月21～24日)、「韓日の歴史をめぐるワークショップ Vol.7」(8月22日)
- * 都倉、山内所員、西村、未来先端基金プログラムのため大阪・中津出張 (8月21～23日)
- * 中津アーカイブズ講座のため中津出張 (西沢8月28日～9月2日、都倉8月29～31日、横山、岡部他2名8月29日～9月2日)
- * 都倉、横山他1名、植原氏宅訪問 (9月25日)
- * 都倉、吾妻山荘出張 (9月28～29日)

■ 講師派遣

- * 西沢、慶應病院新任職員オリエンテーションにて講義 (オンデマンド) : 「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
 - * 都倉、研修医・専修医オリエンテーションにて講義 (オンデマンド) : 「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月3日)
 - * 都倉、新任職員研修にて講義 : 「慶應義塾の特長」、パネルディスカッション・展示館見学対応 (4月4日)
 - * 西沢、事務系新人職員研修にて講義 : 「福沢諭吉と新しい時代、慶應義塾の役割」(4月11日)
 - * 横山、中等部新入生講演 (4月11日)
 - * 都倉、神戸慶應倶楽部三田キャンパスツアー (4月15日)
 - * 西沢、福沢諭吉協会共催の公開講座にて講義「小幡篤次郎小伝」(5月20日)
 - * 都倉、船橋三田会福沢精神研究会講演 : 「福沢諭吉から慶應野球部 Enjoy Baseball へ」(5月21日)
 - * 都倉、墨田区三田会講演 : 「慶應野球と Enjoy Baseball」(5月25日)
 - * 都倉、SFC 中等部1年生道徳授業 : 「慶應義塾で何を学ぶか」(6月8日)
 - * 西沢、大東文化大学で講義 : 「『学問のすゝめ』のはじまり」(6月16日)
 - * 都倉、練馬三田会旧図書館・展示館案内 (6月24日)
 - * 川崎客員所員、福沢諭吉協会共催の公開講座にて講義「開成所・東京学士会院時代の小幡篤次郎」(6月24日)
 - * 西沢、新中津市学校市民講座「女性・学術・社会—福沢諭吉の目」にて司会 : 「福沢諭吉と津田梅子」(7月8日)
 - * 都倉、大阪慶應倶楽部第93回創立記念祝賀会講演 : 「『学問のすゝめ』150年 いま改めて学ぶことは何か」(7月14日)
 - * 都倉、中津市にて中津市長・伊藤塾長対談司会 (8月6日)
 - * 中津市アーカイブズ講座にて講義 (西沢8月29日、上野所員8月29日、都倉8月31日)
 - * 都倉、長野三田会例会 : 「福沢諭吉と慶應野球—独立自尊と Enjoy Baseball」(9月2日)
 - * 都倉、学生部三田史跡めぐりツアー (9月27日)
- ### ■ その他
- * 都倉、FutureLearn 打合せ (4月12日、5月8、11、18日、8月7日)
 - * 都倉、港区史編纂委員会 (4月27日)
 - * 平野所長、福沢旧邸保存会理事会 (オンライン) (5月8日)
 - * 都倉、慶應倶楽部総会 (5月10日)
 - * 都倉、FutureLearn 撮影 (5月17日、6月1日、7月9日、9月14日)
 - * 西沢、国際センター運営委員会 (5月18日、7月18日)
 - * 平野所長、研究所・センター連絡会議 (Zoom) 出席 (5月19日)
 - * 西沢、メンタリングプログラム (5月24日、7月18日、9月29日)
 - * 都倉、港区文化財保護審議会 (5月25日、7月4日、8月8日、9月5日)
 - * 西沢、福沢旧邸保存会評議員会 (5月31日)
 - * 都倉、三田メディア協議会 (オンライン) (6月21日)
 - * 近代日本の慶應義塾とローカル・リーダー研究会 (7月1日)
 - * 都倉、横山、久我、西村、港区ミュージアムネットワーク総会出席 (7月5日)
 - * 都倉、美術品管理運用委員会 (7月10日)
 - * 都倉、KeMCo 委員会 (7月21日)
 - * 都倉、神戸慶應倶楽部100周年記念式典 (8月5日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第39号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2023年10月31日 (年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1604
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷 (有) 梅沢印刷所